

フィンランド語と北サーミ語の非定形補文節

梅田 遼

オウル大学／東京大学大学院博士課程

Ryo.Umeda@student oulu.fi

1. はじめに

本稿はフィンランド語¹と北サーミ語²の非定形補文節 (non-finite complementation) を扱う。本稿でいう非定形補文節とは、主節動詞の目的語項としてはたらき、かつ非定形要素を含み、意味的には命題や叙述に相当する補文節のことを指す (cf. Noonan 1985³)。統語的には、繰上げ構文とコントロール構文が該当する。

フィンランド語と北サーミ語 (とりわけフィンランド語) においては、非定形補文節の形態・統語にいくつものバリエーションが存在する。非定形補文節の形態は、主節の動詞、とりわけその意味によって決定される。本稿では、フィンランド語と北サーミ語の非定形補文節を主節動詞の意味の観点から分類し、それらを Givón (1980, 2001b) が提唱する、事象の意味的統合度と統語的統合度の類像性によって分析することを試みる。

2. フィンランド語と北サーミ語の非定形補文節の統語構造 (繰上げ構文)

フィンランド語と北サーミ語の非定形補文節の基本的な統語構造は両者に共通である。まずは、発話を表す動詞「言う」が非定形補文節をとる場合を見てみよう。「言う」のような動詞の場合、英語の *that* 節に相当する定形補文節と、非定形補文節のどちらもとることができ、意味的には等価である。

(1) Finnish

- a. *Matti sanoi, että äiti tulee.*
Matti.NOM say.PST.3SG COMP mother.SG.NOM come.PRS.3SG
「マッティは母が来ると言った」
- b. *Matti sanoi äidi-n tule-va-n.*
Matti.NOM say.PST.3SG mother.SG-GEN come-PRS.PTCP-GEN
「マッティは母が来ると言った」

(2) North Saami

- a. *Máhtte logai, ahte eadni boahdá.*
Máhtte.NOM say.PST.3SG COMP mother.SG.NOM come.PRS.3SG

¹ フィンランド語は、フィン・ウゴル語族フィン・サーミ語派バルト・フィン諸語に属する言語。主格対格型言語で SVO を基本語順とする。格は主格・属格および目的語の格となる対格・分格のほか、多数の場所格と、一時的な状態を表す様格と変化を表す変格などを含めて計 12 の格がある。一時的な基本的な母音音素は/a e i o u ä [æ] ö [ø] y/, 子音音素は/p b t d k g f v s l r j h m n ŋ /であり、子音は形態音韻論的交替を示す。バルト・フィン諸語とサーミ諸語は約 2000 年前に分岐したと推測され、フィンランド語と北サーミ語で意思の疎通は不可能である。

² 北サーミ語は、スカンディナヴィア半島北部で話されるフィン・ウゴル語族フィン・サーミ語派サーミ諸語に属する言語。話者数はおよそ 2 万人。主格対格型言語で SVO を基本語順とする。格は主格・属対格・入格・位格・共格・様格の 6 つである。基本的な母音音素は/a e i o u/, 子音音素は/p b t d k g l' d' c [ts] č [tʃ] z [dz] ž [dʒ] f v t [θ] d [ð] s š [ʃ] j h j [j] l h l [l] r h r [r] l j [lʲ] h m h m [m] n h n [n] n j [nʲ] /であり、母音・子音ともに複雑な形態音韻論的音交替を示す。無声の阻害音は前有気音化して発音される ([hp], [ht], [hk], [hc], [hč]など)。正書法上の b d g は有声破裂音ではなく単なる無声の破裂音である (i.e. b [p], d [t], g [k])。長母音は á を除いて正書法上は書かれない。また、北サーミ語においては音節数の概念が形態音韻論上重要であり、音節数が偶数か奇数かによって異なったふるまいをする。

³ "By complementation we mean the syntactic situation that arises when a notional sentence or predication is an argument of a predicate" (Noonan 1985: 42) 本稿でも基本的には Noonan (1985) の complementation の定義を踏襲する。

- 「マハッテは母が来ると言った」
- b. *Máhtte* *logai* *eatni* *boahhtit.*
Máhtte.NOM say.PST.SG mother.SG.GA come.INF
「マハッテは母が来ると言った」

(1a) と (2a) のような定形補文節は、通常の定形節と同様、主語は主格、述語動詞は主格主語との一致を見せている。一方、(1b) と (2b) のような非定形補文節では、非定形節の主語は属格⁴ (フィンランド語) ないし属対格 (北サーミ語) で現れ、述語動詞は現在分詞属格形 (フィンランド語) ないし不定詞 (北サーミ語) と、非定形の形になっている。

(1) と (2) は非定形補文節が現在形の例であるが、フィンランド語と北サーミ語ともに、過去分詞を用いた形も可能である。この場合、非定形補文節は主節動詞よりも時間的に前の動作を指す。

- (3) Finnish
Matti *sanoi* *äidi-n* *tullee-n.*
Matti.NOM say.PST.3SG mother.SG-GEN come.PST.PTCP-GEN
「マッティは母が来たと言った」
- (4) North Saami
Máhtte *logai* *eatni* *boahhtán.*
Máhtte.NOM say.PST.SG mother.SG.GA come.PST.PTCP
「マハッテは母が来たと言った」

フィンランド語と北サーミ語においてこのような非定形補文節をとる動詞は、典型的には認識・認知・発話に関する動詞である (Perception-cognition-utterance (PCU) verbs, Givón 2001a, 2001b)。

以上に挙げた現在分詞・過去分詞・不定詞の他に、北サーミ語においては行為名詞様格形と呼ばれる、英語の *-ing* 形に似たような要素が非定形補文節を形成することがある。たとえば、認識を表す動詞は、北サーミ語においては行為名詞様格形の非定形補文節をとる。(6) のように、行為名詞様格形と呼ばれる形がそれである。一方フィンランド語においては、認識を表す動詞であっても、(1) に見たように、現在分詞形をとる (5)。

- (5) Finnish
Minä *näi-n* *häne-n* *tule-va-n.*
1SG.NOM see-PST.3SG 3SG-GEN come-PRS.PTCP-GEN
「私は彼が来るのを見た」
- (6) North Saami
Mun *oidnen* *su* *boahhti-min.*
1SG.NOM see.PST.3SG 3SG.GA come.AN.ESS
「私は彼が来るのを見た」

⁴ フィンランド語では通常、否定文の目的語は分格になるが、非定形補文節の属格は主節が否定文の場合でも分格にならない。

- (i) *Matti* *ei* *sano-nut* **äiti-ä/äidi-n*
Matti.NOM NEG.PRS.3SG say-PST.PTCP mother.SG-PART/mother.SG-GEN
tule-va-n.
come-PRS.PTCP-GEN
「マッティは母が来るとは言わなかった」

したがって、以上を総合すると、非定形補文節の形態はどうあれ、以上に挙げた構文は以下のような統語構造を共通して持っている。

(7) [V_{FIN} [NP_{GEN} V_{NON-FIN}]]

属格の名詞句は主節の定形動詞の目的語項であると同時に非定形補文節の主語でもある。この名詞句の特殊なステータスは、例えばフィンランド語において否定文の例が示す通りである（注4を参照）。(7)の統語構造は、典型的な繰上げ構文の構造であるといえることができる。

しかしながら、(7)のような統語構造を持つのは、認識・認知・発話動詞から形成された繰上げ構文に限らない。いわゆるコントロール構文も、(7)に似た構造を持つ。次節では、コントロール構文の例を見ていく。

3. フィンランド語と北サーミ語の非定形補文節の統語構造（コントロール構文）

フィンランド語と北サーミ語で(7)に似た構造をとることのできる動詞には認識・認知・発話動詞のほかに、願望・許可の使役・命令・強制使役などの動詞が該当する。これらの動詞は、いわゆるコントロール構文を形成する。フィンランド語と北サーミ語のコントロール構文の最も大きな違いは、フィンランド語のコントロール構文の非定形補文節には現在分詞・A不定詞（基本不定詞）・MA不定詞といった三種類の非定形要素が現れる一方、北サーミ語においては不定詞のみが現れる点である。また、フィンランド語においては、名詞句の格標示にも属格以外の可能性が生じてくる。

まずは、願望の動詞を見てみよう。願望の動詞の場合、2節に見た繰上げ構文と同様、フィンランド語では現在分詞、北サーミ語では不定詞が非定形補文節を形成する。

(8) Finnish

<i>Me</i>	<i>halua-mme</i>	<i>tietenkin</i>	<i>Kautokeino-n</i>	<i>voitta-va-n</i>
1PL.NOM	want-PRS.1PL	of.course	Kautokeino-GEN	win-PRS.PTCP-GEN

「私たちはもちろんカウトケイノに勝ってほしい」

(9) North Saami

<i>Mii</i>	<i>háliidit</i>	<i>dieđusge</i>	<i>Guovdageainnu</i>	<i>vuoitit</i>
1PL.NOM	want.PRS.1PL	of.course	Kautokeino.GA	win.INF

「私たちはもちろんカウトケイノに勝ってほしい」

次に、許可の使役であるが、今度はフィンランド語と北サーミ語のどちらにおいても基本の不定詞が現れる（フィンランド語のA不定詞は基本の不定詞に相当する）。

(10) Finnish

<i>Me</i>	<i>anno-i-mme</i>	<i>verko-ssa</i>	<i>olla</i>	<i>sotku-ja</i>
1PL.NOM	let-PST-1PL	net-INE	be.A.INF	tangle-PL.PART

「私たちは網にからまりがあったままにした」

(11) North Saami

<i>Mii</i>	<i>divttiimet</i>	<i>fierpmis</i>	<i>leat</i>	<i>soriid</i>
1PL.NOM	let.PST.1PL	net.LOC	be.INF	tangle-PL.GA

「私たちは網にからまりがあったままにした」

ここで注目すべきは、フィンランド語では名詞句が分格になっている点である。

次に、命令の動詞であるが、フィンランド語においてはA不定詞に加えMA不定詞入格形（英語で言う *for -ing* に相当）の形も可能であるのに対し、北サーミ語では上述の例と変わらず不定詞が現れる。また、フィンランド語においては、A不定詞の場合非定形節の名詞句は属格であるが、MA不定詞の場合分格になるという名詞句の格標示の差も観察される。

- (12) *Hän kask-i meidän olla/meitä ole-ma-an valmii-na*
 3SG.NOM order-PST.3SG 1PL.GEN be.A.INF/1PL.PART be-MA-ILL ready-ESS
kun hän tule-e
 when 3SG.NOM come-PRS.3SG
 「彼（女）は私たちに彼（女）が来たときには準備ができてるように命令した」
- (13) *Dat gohčui min leat geargan*
 3SG.NOM order.PST.3SG 1PL.GA be.INF ready.ESS
go son boahťá
 when 3SG.NOM come.PRS.3SG
 「彼（女）は私たちに彼（女）が来たときには準備ができてるように命令した」

最後に、強制の使役であるが、フィンランド語においてはMA不定詞入格形のみが可能である。北サーミ語では、依然として不定詞である。目的語の格表示はフィンランド語の例（14）では対格になっているが、分格も可能である。

- (14) *Opettaja-t ovat laitta-nee-t lapse-t nukku-ma-an*
 teacher-PL.NOM be.PRS.3PL make-PST.PTCP-PL child-PL.ACC sleep-MA-ILL
 「先生たちは子供たちを寝かしつけた」
- (15) *Oahpaheaddjit leat bidjan mánáid nohkat*
 teacher.PL.NOM be.PRS.3PL make.PST.PTCP child.PL.GA sleep.INF
 「先生たちは子供たちを寝かしつけた」

以上に見たように、北サーミ語ではほぼ同じ統語構造を示すものの、フィンランド語では非定形動詞と非定形補文節の主語となる名詞句の形態にかなりのバリエーションがある。

4. まとめ

以上のデータをまとめると、以下の表ようになる。

表1：フィンランド語と北サーミ語の非定形補文節のまとめ

主節動詞	非定形動詞の形態		非定形節の主語の格	
	フィンランド語	北サーミ語	フィンランド語	北サーミ語
認識	現在分詞	行為名詞様格	属格	属対格
発話	現在分詞	不定詞	属格	属対格
願望	現在分詞	不定詞	属格	属対格
許可使役	A不定詞	不定詞	属格/分格	属対格
命令	A不定詞/MA不定詞入格	不定詞	属格/分格	属対格
強制使役	MA不定詞入格	不定詞	対格・分格	属対格

少なくともこの表から言えることは、北サーミ語において不定詞がかなりの範囲をカバーしており、非定形補文節の主語となる格形も一貫して属対格である一方、フィンランド語にはかなりのバリエーションが見られることである。

では、フィンランド語のバリエーションはどのようにして説明が可能であろうか？ 非定形動詞の形態のみに限って言えば、統語と意味の類似性からある程度説明が可能であるように思われる。補文節における類似性については Givón (1980) の *binding hierarchy* による分析に始まり、さまざまな説が提唱されているが、本稿では Givón (2001b) が事象の統合度 (*event integration*) について述べている箇所を引用する：

(16) Event integration and clause union

The stronger is the *semantic bond* between the two events, the more extensive will be the *syntactic integration* of the two clauses into a single though complex clause. (Givón, 2001b: 40)

すなわち、二つの事象間の意味的なつながりが強いほど、その二つの事象を表す節の統語的なつながりも強くなるということであるが、事象間の意味的なつながりが最も弱いと考えられる認識の場合と、事象間の意味的なつながりが最も強いと考えられる強制使役の場合を、それぞれ両端にとり、フィンランド語と北サーミ語の非定形補文節をスケールに当てはめてみると以下ようになる。

表 2：フィンランド語と北サーミ語の非定形補文節と事象統合度のスケール

North Saami								
<---	V _{AN.ESS}		V _{INF}			---		
	Perception	Cognition	Utterance	Desiderative	Permissive	Imperative	Causative	
<---	V _{PRS.PART}		V _{PRS.PART}	V _{A.INF}		V _{A.INF} /V _{MA.INF}	V _{MA.INF}	---
Finnish								

しかしながら、フィンランド語における非定形補文節の動詞の形態の選択は事象の統合度とある程度関連していることが予測されるものの、このスケールが本当に意味あるものなのかどうかは当該の非定形動詞の形態が他のどのような統語的環境に現れるかを精査して初めて検討が可能であろう。また、非定形節内の名詞句の格標示も、考慮に入れる必要がありそうである。少なくとも、北サーミ語の不定詞が、意味的にかなり広い範囲をカバーしていること、また、フィンランド語では動詞の意味に応じて非定形補文節の形態・統語にかなりのバリエーションが生じることが本稿では示された。

略号一覧

ACC 対格 (Accusative)、AN 行為名詞 (Action Nominal)、COMP 補文標識 (Complementizer)、ESS 様格 (Essive)、GA 属対格 (Genitive-Accusative)、INE 内格 (Inessive)、ILL 入格 (Illative)、INF 不定詞 (Infinitive)、LOC 位格 (Locative)、NOM 主格 (Nominative)、PART 分格 (Partitive)、PTCP 分詞 (Participle)、PL 複数 (Plural)、PRS 現在 (Present)、PST 過去 (Past)、SG 単数 (Singular)

参考文献

- Givón, Talmy. (1980) The binding hierarchy and the typology of complements. *Studies in Language* 4: 333–377.
 Givón, Talmy. (2001a) *Syntax: An introduction. Volume I*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
 Givón, Talmy. (2001b) *Syntax: An introduction. Volume II*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Noonan, Michael. (1985) Complementation. Shopen (ed.), *Language typology and syntactic description. Volume II. Complex constructions*. Cambridge: Cambridge University Press, 42–140.